

# KEYAK!

11月号

## 『touch』

この間、ぺんぎんサークルでさようならをした後、保護者の方から「うちの子が先生とさようならのタッチしたいと言っているんですけどいいですか？」と言われ、もちろんOK。目を合わせその子の手に触れたとき、お互いの笑顔の中にビビッとというかジワッと何か感じるものがありました。今年度になって、挨拶だけでさよならあんころもちも頭を撫でることもハグすることも手のひらタッチですらもほぼなくなっていました。在園児とは勢いでイエーイとなるときはありますが、後で消毒してね～なんてことを言わないと気にしていない人のように思われたら困ります。

私たち(私だけ?)保育しているものにとって子どもたちに直接接触れる(スキンシップ)ことがどれだけ重要なことかを思い知らされます。言葉のやりとりも大切ですが言葉の往復だけでは伝わらないものがあります(しかもマスク!)。言葉より大切なものが絶対にそこにはあると思います。

触れる、には今のような直接的なことと、物事や事象に触れる、という間接的な意味もあります。秋になって寒さを感じたり葉っぱの色が変化したり、こどもかいもそんな要素を多分に含んでいます。お話の絵本を読んで新しいことばとの出会いに触れたり、繰り返しのやりとりの面白さに触れ、そこでお話の内容を理解していくことができたり、げき活動の取り組みの中で「表現」という分野に触れ、新しい自分の一面や周りの友だちへの発見があったり、また改めて自分たちのクラスに対する意識が持てたりとその側面は多岐にわたります。

今年度はこどもかいの内容にも変更は生じてしまうと思われませんが、子どもたちの取り組みの意義は変わりません。彼らの取り組みの過程を想像しながら、子どもたちに、鳴子さながらにたくさんの拍手を浴びせられる機会にも触れさせてあげましょう。温かい目での応援よろしくお願い致します。フシ～、触れ～、子どもたち!